

「自然の中にそびえたつ芸術の産物」

白木谷国際現代美術館を訪ねて

「たけのこの里 白木谷」に美術館があるのを知っていますか？

高知県展覧無鑑査の洋画家 武内光仁氏が自ら館長を務める私設美術館「白木谷国際現代美術館」です。

出身地である白木谷で、1998年に野外個展を行ったのをきっかけに、手作りで、2009年に開館しました。アトリエとしてだけでなく、ご自身および交流のある作家達の作品の展示場として開設し、過疎化の進む白木谷地区の活性化に少しでも役立てばとの強い思いもあるとのこと。

武内さんは、現在も国内にとどまらず海外へも…と意欲的に創作活動を

続けながら、美術館でも毎年企画展を開催しています。2014年に新設された「我呉谷（かくれや）」には、日本では珍しいマコンデ黒檀彫刻コレクションが展示されています。

我々広報委員の中にも、気になりながらも未だ行ったことがない者もあり、是非この機会に…と、猛暑にうだる8月20日、笠ノ川の水音と蝉時雨が降り注ぐなか取材に行ってきました。今回の特集は、その報告です。

後日再訪した際にも、「絵の具の乾く間」にご本人からお話をうかがえまし

た。丁度、見学に来ていた少年の質問にも気軽に答えておられ、そのなかで香南市野市町「創造広場アクトランド」の内装を手掛けられたことも知ることが出来ました。

「私は受付と掃除・雑用係で何もしていません」とにこやかにコーヒを淹れながらも、熱心に作品や美術館の説明をして下さる奥様の笑顔がとても印象に残っ



トレードマーク
手形のエントランス

◎手形のアートがたくさんある。小さな手から宇宙へ壮大なテーマを感じる。



無言の抗議

◎「無言の抗議」は当初の荒々しさから年月を重ねるごとに柔らかさをおび、屋外の作品ならではの。



生かされた69年の時空・影の存在

芸術の中で生きてきた武内さん

少年時代

少年の頃から芸術に興味を持ち、高校2年生の時、先輩と「笛」という画廊で2人展を開いたのをきっかけに、県展への出品を決めたそうです。

当時は、山道をお兄さんにバイクでリヤカーを引っ張ってもらい3点出展しましたが、見事に落選。大津からくやしくて泣きながら帰ってきたそうで



子供たちへ、一番苦しかったことを忘れないで欲しい

反骨精神（2度の反抗）

1度目の反抗はお母さんです。大変厳しい中にも優しさのある人でしたが、毎朝晩に「人並みの努力なら、人並みで終わる。」という言葉が口癖のように言われ、反抗期（中学生）の武内さんは人並みで終われば上等ではないかと反発したそうです。それ以降、お母さんはそのことについて何も言わなくなったそうです。

2度目の反抗は、美術評論家ヨシダ

ヨシエ先生（後の白木谷国際現代美術館の永久名誉顧問）でした。お会いするたび「太郎（岡本）には負けるなよ、太郎に負けるなよ。」と言われ、武内さんは「太郎さんの家系は、経済的に心配がいらぬ。そんな人に勝てるわけがない。」と反発したところ、ヨシダ先生がテーブルをひっくり返して「武内おまえは、何を甘いこと言っているんだ。もうお前とは会わない。」と言って帰られたそうです。その後、同席の評論家の先生から仲裁があり、ヨシダ先生から「お金がある、ないじゃない。自分の信念を持ってやらんか。」と叱られたそうです。

お母さんと、ヨシダ先生に執拗に同じことを言われたことで、一念発起。負けん気とか、勇気、情熱に変わっていったのではないかとおっしゃっていました。



都庁へ展示した
「青い基地」

◎大きなアート作品がたくさんある。子供たちも自然とワクワクする。

ワンマンショー
50歳の時に、この土地を使って野外ワンマンショーを開催。その時に使ったのが毎日通い運んできた、230トンの須崎、浦ノ内の玉石です。山からゴロゴロ落ちて、石から砂利に変わっていくことにこだわり、それを山に逆流させたい！という思いで作品を創作したそうです。このワンマンショーが、韓国への出展機会となり20世紀池田美術館、そして東京都庁への出展に繋がっていきました。当時の石原慎太郎東京都知事の目にとまり、2004年に都庁正面玄関に展示された「青い基地」は庄巻です。その後、モンゴル、フランスなど海外にもたくさん出展していきます。